

うしろアンのロジック ― 二〇〇七年版



うろこアンソロジー―二〇〇七年版 目次

思う雑草	足立和夫	3
冬をこるがる骰子	―堀川正美に捧ぐ5／冬霧の路地のほうへ	―堀川正美に捧ぐ6
倉田良成	6	
嫁入る狐 旅籠／嫁入る狐 蟹気楼／嫁入る狐 汽車	海桊今日子	12
あんなダイアナゆきのコスモス	南原充士	21
雪がふる	高田昭子	26
語り、沈思／灯に明るむ思い出／風のなかで話しましょう、詠唱	富澤守治	29
山から来たの	三井喬子	40
将棋のソネット	桐田真輔	43
エイハブの左足・ランボーの右足	有働薫	45
Eclogue	水島英口	48
ぷらいど／敗北	岡田すみれこ	52
島影の見える場所から	―沖繩 1987年の記憶のために	石川為丸 57
老残	若井	61
探して、愛	一瀉千里	62
液体	清水鱗造	65
百行詩	田中宏輔	67

思う雑草

足立和夫

旋風つむじかぜが

吹くところ

雑草が

濃く緑なした

ちいさな空き地

そこに迷い込んだ

わたしは

半分ほどのところを

湿った地面のなかに

寝かせてみた

暗い地中で根を延ばし

草は養分を吸い込んでいた

朝がぎりぎり

ひろがって

発光する

曇天の粒子をとりこみ

夜が葉に降りると

闇の匂いが張りつめた

風がながれるままに

葉はうごき

雨に叩かれるままに

葉はしずかにしている

こころも

しずかになっていた

もう草になっている

緑なす雑草たちだ

翳る光のしたで

わたしの姿は
藪のなか

冬をころがる骰子

—堀川正美に捧ぐ5

倉田良成

丘のひくいところに風の冷たさはかさねられる

紅潮し、層をなして、空のまうえから垂直にきわまりながら

ビルの物陰でみひらく金色の寒いひとみ

まえにあるドアを開ければいつも黄昏にみちた室内で

ドアをうしろ手に閉めればいつでも朝影につらぬかれる

世からすばやく縁を切るという智慧は

投擲された骰子の華麗さで世間のただなかをころがってゆくのだ

巖に縛りつけられたプロメテウスのはらわたのようにきんたんと

おののきながらの花ひらきを示すサザンカのはなびらよりも濃くあまく

空即色のおびただしい文様の極彩で冬空がいっぱいになる

カササギたちの血をながす眼でいっぱいになる

しずかに目のくらむ昼の花火によって

ここから見える海は遠く

また近く

それならばなぜ、われわれは

あの風の吹く辻に露台を立てて

きらめく時計を並べるもの売りの芸能をさげすんだのか

それぞれにちがう時間が進む

無数の異なった星を並べているあのもの売りたちの芸能を？

夏が終わって秋が来るのではないとむかしのひとは言った

裸の木は死んでいるのじゃない、うつつのものではないだけ

斧を入れれば絶叫のように鮮烈な匂いを迸らすだろう

枝打ちの者とすれちがうとき、幽かな音（ね）を聞くような

サカキの、タブの、クスノキの新らしい靈気のうちに

おごそかに知らされてくる冬

丘のひくいところに風の冷たさはかさねられる

もがり笛鳴る曇り日の電線から電線を伝って

鳥は神聖な霜を恋い、霜を呼ぶ

うなりつづける千年のトランスだつて

虹色のハヤニエを凌駕しない

ただに見る、水晶玉の波濤の散らばり

垂直にきわまってゆく冬の蒼穹の底にあつて想う

みどりいろの、光る、完璧な

還らない、夏

知らぬまにこの世に生まれてきたわれわれは

みずからの死に目に

たぶん

会うこともない

冬霧の路地のほうへ

—堀川正美に捧ぐ6

三叉形のグリッドを細かに入り組ませて出来上がる茶色い町はすでに谷の底で耀う
ヤキトリの臭いのたちこめる夕ぐれの路地のほうへ曲がる

このかわたれどきの誰とも知れぬささめごとは敏感な跨線橋をこえてゆき交い

静かにつみあげられた誤差は美しいサイレンとなって日没に裂(き)れをはしらす
煙突の梯子をのぼった男は冲天に身投げしてもう降りてこない

はごろもをのこして
変成のへんじょう

あそこからここまで

熱い酒をすする謎だらけのカウンターの端から端ほどのながさだったのだ

なぜこの町の寺はみんな東に向き

なぜ寺の背後の丘に日は沈むのか

なぜ町のただひとつの街頭時計は四時をさしたままうごかないのか

いまも日輪を追って移動しているヒトカゲが見える

肩に蜥蜴のタトゥーの少女が海の街に逃げ去ると

埋立地の空にはすばらしい雲の神殿がばら色に騰がりつつける

ほんとうは

奇跡にめぐりあうなんて恐ろしいことなのだ

肉体を悲しんで音楽の林檎をわたるとき

のみほされる残生の完全な円からなお刻々と発してゆく鋭利な接線
うたげのようだとのひとは言った

なお海を愛するとも

ヤキトリの臭いのなかにさらに迷いこむ

あたたかな一月の霧がわが口をふさぎ

葱の大理石質の白が冬の理性のようにかおりだす夜にちかく

きらめいている月のかんばせ

こうこうと惨酷に浴びる月のかんばせのひかり

透明な絢爛を鎧のように一劃ずつぬぎすててやがて自分さえぬぎすてるとき

海賊船の船長は

厳肅な神話語りのように古い絵本のうちによみがえる

わが亡霊は

ねぎまとレバ焼きの紙づつみがもつ子猫ほどのぬくもりをかかえて帰るのか

柱時計のバネが鳴る破れたふすまのある部屋へ

すりきれっちまった組紐みたいなヒエログリフを太古のゲノムのようにかぞえながら
賢者縞蛇として

いま春の大空のようにあまいいざないは流れ

ふかい嘲笑の四つ角で弓を弾きはてしなく物語りする差別者、われは。

嫁入る狐 旅籠

海禁今日子

ほんとうにくらい味でしたから、きこえるような気がしたんです。宿のほとりで耳をあがない、その分とじながら、中空にまなうらを点在させる、女たちのつぐないをひらけ。栗色のけはい、暗緑色のけっそん、いにしえのしらべをまとおうとする、それは懸命なとおりがりだったのだろう。宿泊でなければ、あなたたちの違和、ぬうこともはがすこともできないのだから。狐火の断片をあつめ、窓にのこった行列を説明したい。とりのこされたあかりが空耳のなかでねがえり、明滅をやいている、あの日のとだえをさわぐので、おもいかばん。そんなにおいついてどうするんです？ 夜とぎのようなであいがしら、てわたされた宿帳には、にせのあかしがつづられる。銀の関係がうがたれ、壁、ちいさなひみつをしまおうとしていたのかもしれない。つむった鍵の共有により、まばたきにさしたい、「そうではない、わたしたちが、そ」、遮断は昼にこそふさわしい。泊まることで家をぬぎ、にがいような銀のほおずりをおもいだし、とどまる男の、女の、

せめぎあいをくりかえせ、扉。おもいのほかやわらいでいたから、もやせるとおもいました。窓のほつれるわたしをてらし、ねりあるくあまい水分、攪拌をむすび、わたしをはじめてわれる土。ちぎったのでそむけたい顔、ぱりぱりの下着は、どんな時間をもたげたかったのでしょうか。中庭の池だったかがくろずんだマイマイをちかづけ、月のしょっかんをいとしんでいる、といったいいつたえに似つかわしい、銀の点在は、きつと忘却ぶんさしひかれていた。そのあかるさをまちがえ、つまずいて、夏のあたしをいだく男は、きつと到着しているだろう。狐の点滅がやりきれない。つんださきからはじまる話に、客のひとりが日々をほうる、銀のしせんがにぶくかえって。灰緑のめくるめく受粉、褪色をたばねてあざやかな肖像画、それは季節をはじく参加だったのかもしれない。つないだ家をだれもがはなれた。ふりかえつても前方でしたから、水がもえているような気がしたんです。行列たちがほどいた平行線を、ちりのなかであらっている、なら、あれはきつとさいごの影絵。とじこめた合図がわずかにすれあう、だからなされなかつた旅装をわたしになげよ。しきたりを遠出させようと、宿をおきる。遮蔽は狐たちにごぼれるわなだ。くいちがう一周をみつめあう、男はあたしをでたかった。窓をつむったマイマイが女たちをしばしつめたい。

嫁入る狐 蜃気楼

キツネのような距離をあおぎ

おとこのなかでながしてみる

ころがること、ねがったことがくちてゆき

しじまのましたでうねるだろうか

くぐもって さけんだ息にぬれるおんなだ

すべすべの表面でしたね

触感をたばねながら移動する

あれは乗りこむひと、びとだから

わたしをよぎろうときめたんです

はなれたあかつきに

きつとこすれる

うそのすきまにいそぐ寝息
そのまたたきをおよぎたい
もぬけの殻をおとこのみだれる

ふりむく陰影にゆだんさせ

おんなたちの粘液

かなでてみたかったのだと

ひもをひきずり、はぐれては

貝あわせのささやきに

しずんだほんとうがあふれだす

きこえてくるのは いつもおおかれてくる雑踏

あるいは希望にたりない誤差だった

心音にさかしまになった都市の

いとしい

「ぎつねの森」ともいこうそうです

とつぜんのいぶぎ

はねるようにさってゆくのは

いつでも shouldn't 住みかだからかもしれない

その先端でうしなわれた木々をうずめる

ふたにちらめく、もどかしいあえぎ

あの印象はどこでしたか

ちゅうとでまさぐる気候でした

すれあう動悸ははんぶんだけ

まどろむようにかわくだろう

貝の殻がしぼるようです

しんから角度をかえるおともいた

けっしてうっしてなんかなかったのに

おんなの息が地形をくぎっていた

街をとりまくよどみよせて

わたしのよな殻をつむる

狐にゆだねた二枚たち

きつとかえそうとしたんです

だれもがふまれ、森をそそぐ

きしんだつがいがうまれるのだろうか

もえあがるおとこの貝を

ついだ息が、いっそ

もとの傾斜にますますめざめる

たぶん、のまれる住みかなら

つくろうとしていたんです

体温のおりて、またはころんだのだから

おとこをつんざく季節もおわれればいい、と

たくしたものは都市をけっして

しりません、ききたかった

消息のなかでうすらいでいる

あるぞらつき、あるとじた
まうえにたなびく貝によせて
わたしはきつとはしらをほうる
なんどめかの距離のゆがみに
みなかったものたちであふれる呼気だ

嫁入る狐 汽車

距離がすくんでいた、あの基点を雨にするのだ。かきなぐった会話をかかえ、かわいた掬をきぎんでいる。雨足になびくしかけが口ごもり、晴天のなか一粒をうけとめたい。かつてわたしは無言をよこぎり、街のかたえをあたためていたのだから。はがゆきが杖をつくり、かげるくるぶしをささえていた。脇をひく潮として、通りの声をわすれてしまふ。予感たちをつめこんで、流れた雨がひととき線路をたずさえて。めりこむわたしに彼をなじませ、ほどいた手でたぐっている。あとさきばかりがむすばれて、積み木の

ようにうすれる角だ。とどこおり、街、近隣をたちきるので、やましいほど緑の丘、ぬれた郷愁をもらっていたかった。まちわびた新芽たちが、枯れた線路をはぎとって。女をすぎた枕木が、雨をつたえ、のがしている。ざわめくホームに、男のしずくがききました。むれなす影が無人をくぐり、駅のふところをかぞえていたので、すこしの往来。女のすぎた枕木が、日々につぶせ、亀裂にあらがいふるえよう。あなたのこぼれた目覚めに芽吹く、うねるしずけさが彼をゆきたい。

指の木陰でわたしのさされる。街路樹のおわりでかかげた生が、かげろうよりもなお落ちるのを、さわれるような気がしたのだった。しずくのかたえで指、とてもしげって。ざらつく舌をゆききしては、うかんだ樹々にかかる想いは、きつとやさしい、にがかった。晴れわたったしたたりが、うずいていた。つみあげた会話を風がたわめる。日差しのかなで波うつ肌は、彼をしずみ、きつとうかび、街をさわる無言なのだ。ぬれた喪失が見えかくれする、日々のこだまがまがった角にて。くつがえった詳細は、男の湿り気をたもっている。うけいれがたい、みつめてしまった彼らだった。くつきりと雲、あらい飛沫をつくっている。緑の速度をつたえてくるのが、ふいだった。あおむけになった基点をそむけたい、うめたくなる。遠浅のような晴れ間なのです、といったわたしもまた距離だから。天気雨はらせんをつきたて、駅舎をまたぐとききました。昔のかけがあ

つめた女に会話がときおり虹をうたう。近郊があおあおともどり、はなれてゆく。線路のきしみがますますはげしい。

初出：『something 5』

あんなダイアナゆきのコスモス

南原充士

(あたしね、だれとでも仲良くなっちゃうの)
きみみたいのがこわいな

(でもからだのあちこち具合が悪くて・・・)

(お医者さんに行くたび叱られてるわ)

(え、健康そうなのに)

このぴちぴちした肌なんてすばらしいのね

ところで なにしてるのが楽しい？

(そうねえ、ぱーっと買い物するのなんかいいわ)

(だから、いつもお金がなくて・・・)

(ねえ、あたしをアイジンにしてくれない

月に〇〇万円ももらえればいいわ)

うーん 考えとくよ

きみはほんとにかわいい眼をしている

ぼっちゃりしているところが また いいね

(ありがとう)

(ああ、歌が歌いたくなっちゃった)

それじゃ、ヒカルちゃんの歌 歌ってほしいな
でも、きょうはそろそろ帰る時間だ

(あら、残念だわ)

(また近いうちに誘ってください)

待ってるわ)

いいとも、きみみたいにめちやめちや明るい娘は
大好きなんだ

ペンションへ行ってテニスをするのもいいね

(わあ、すてきだわ)

(きつと連絡してよ 楽しみに待ってるわ)

・・・さて、別れたら もう心は飛び始める

光は暗い空間を走ってゆき

ふと時計を見ると四十六億年は経っている
物質はさまざま旅をしている

なぜ、あの娘はあんなに惹きつけるのか
ほとんど問う間もなく

人類が消え失せたあとの銀河系に
しかし 無限の素粒子は

リビドーだけはたしかに記憶しているらしい

(きつと、きつとよ)

何やら公式のようなものをつぶやいても
一度気づいたら

どうしようもなくつらいことがあつて

ぼくたちはきつく抱き合うことになるのだ

(ナイス・トウ・ミーチュー！)

ウォークマンを聴きながら

(ブティック)

(コスメティック)

(エステティック)

そして コスモス

雪がふる

高田昭子

時間はしずかに降っている

わたくしたちは

きつとどこかにたどり着けるだろう

地点でもなく 安息の場でもなく

空と地上のあいだを

雪が舞い

闇が少しづつ深くなって

地上はやがて空と了解する

雪の一夜に

うつ伏せに眠るひとの

やさしい寝息が聴こえている

薄闇のなかにも時間は降りつもる

平明な言葉に

しずかにキー・ワードを降らせた夜更け

一しずくのメッセージが

解けてゆく夜明け

まぶしい朝の窓辺

あたたかいコーヒーを飲みながら

「叙情の断念」について語りながら

ひとはそれを手放さないだろうと想う

時間は止まらない

たがいの今の時のなかで

過去や未来を

自在に行き交うことができるのだろうか

わたくしの時間は

朝ごとに 歩きはじめる

初雪に足跡を残して

古いニュース紙を取りにゆく

語り、
―沈思―

富澤守治

男であれ、女であれ

この世に生まれ出でた意識に映る

影、すなわち「私」の映像

私のものであれ、誰のものであれ

われら、記憶の合間（アワイ）に立つ身であれば

この「イマ」に先立つことなく、後れることもなく

迷うことも、振り返ることもない

その川の記憶があぶくとなり

よどんでは流れ去るにしても

世界は顕あきらかにして

過ぎ行くこの一陣の風にも思いが込もる

廻りを見渡していくようにして

私はこの世界の文脈を通り過ぎてゆくのだが

思いが嵩るせいか、欲望・希望によるものか

この日常が破断するとき、私は苛立ちを覚える

それは波の種類しなごころの圧力であるが、寄せることも

引くこともない

ただこの潮は、最後のときまでは昇り続けるのだ

「潮」、人間の神々に属するもの、疫神？

文脈に依り、文脈に属するものではあるが

それを読むものに非ざるもの、属まはさざるもの

ときに潮は「苦しみ」にして、世界のうちに出会われる

苦悩との終わりのない闘いのなかで
この文脈に立ち向かう、人知れず
格闘している人々のうちなる森は深い

列柱の森

悪意と諧謔に取り付かれた自己保存の本能を相手にする
闘争と疑念、駆け引きが構築されて

あてのない悲しみ、疑いの愚かさが溢れ出る

誹謗・そしり・断絶

何事も溺愛するものと偏愛するものたち

社会と事実をまだ知らないひとたち

あるいはいのちにかかわる病苦たち

こんな荒れ野に立つ丘に労多くして登っても

見出すものは名もなき言葉たち

多くの言葉たちが取り残された詩（ウタ）

筆致が乱れた、それは主語なき文書で綴られている
かくて文脈は不可能である

あえて歌おうとするのであれば

私個人の本心は慰撫されたいのだろう

本当に声をあげれば、それははなばなくも

いのちの歌になって、人生のなかに割れていくだろう

でも歌うことは慎んでいる

心の用意だけをしておこう

私だけの問題でもなかろうが

その気になってくれるのであれば

誰かに聞いてもらいたい気もする

「語りだすこと」が、他人に伝わるのが本性であるとするれば

それはなおさらのことだろう

火に明るむ思い出

ともされた火に明るむ

春のはじめ、宵の気、まだ冷たくあり、そよいで

まだ夜の戸帳が、沈黙の海にただよっていたころのこと
思い出す、二人を取り巻いていたカゼ

あの夜、暗闇の歌はいつまでも音にならず

茂みに溢れていた

その清涼さにもかかわらず

二人の心は、まさしくよこしまであった

しかしそれをかまうことなく

陥ちていった、恋

交わす言葉を、互いが求める意識が凌駕して、それほどの意味もなく
瞳が見つめ合うことに溺れる

長い、長いひととき

さらに悲しみにも笑いにも、感情は波打つことなく
静謐は、激しくあふれた

十分に抱き合つたにしても

もう性の衝動でさえ、わずらわしく

私はと言えば、彼女の胸元を見つめても

感動なく、まさぐつた

求める意識に答えなどはなく、また

必要もなかった

底なしの見つめ合い、こころ通う
放心のとき

あまりにも短く

瞬時に過ぎた至福の時代

火は踊り、照らし出す、顔と、顔

不安と荒廃に縁取られた

野に若きころのコト

ともしびよ、怒りに枯れる冬の夜を謡いて照らせ遠き野のはて

蒼きわれ眠れぬ夜を幾月夜いつかは果たす風の彼方へ

恋いとはかなしく血の沈む悪夢と思いしあのトキの定かなる

あのひとのたたずまい
かすれ行くもの…

クチ惜しく

(それは…、とどまって、男心、残り、そして…

風のなかで話しましょう)

風のなかで話しましょう、詠唱

冬、風のなかで話しましょう
少し息が切れてきたのか、あなたよ

吹き荒れている世の中の流れのなかで
うつむく

風のなかで話しましょう
かりそめ

舞台衣装のなかで光っている身体を
あなたはどうすればよいのだろう

歌はもう謳われている
詩は詠まれている

風のなかで話しましょう
もう誰も黙してはいない
今やチカラが荒れ吹き
ライトは太陽と同じように
爆発している

春、まだ早くあり

風のなかで話しましょう

今日は陽が差してきた。光と影と、

ものに曳かれて

流れていく視界の片隅にも

きらめいている、ココロのモノタチがいる

それらと共鳴するかのように、蠢（ウゴメ）いている

私の、堅い心の底からも湧いてくる

地の薫り、起きた物事の重なりは

この足許の下にあり

私を暖めている

それゆえに風が吹くことができる

歌っているカゼ！

風のなかで話しましょう
陽・風・水、流れいくものと
天地

山から来たの

三井喬子

わたしの可愛い黄蝶が言った

山から来たの と

重ねて言った。

この世のはてから来たのだろうと

言いも終らぬうちに舞あがる。

これは誰の魂なのだろうか

とりわけ涼しい風が

がらんだうの身体を吹き抜ける。

わたしの心は空中の蜘蛛の巣

無用心な飛行はおやめなさい。

おまえを獲りたくはないのです

可愛い黄蝶

いとしい魂

おまえを食べたくはないのです。

でも夕陽がわたしの罪を照らすから

おお わたしには触れないで！

せんじつめれば お互いに

いつかは死ぬ定めの下にあるのだけれど

際限の無い産出でもあつて

おまえはわたしの大きな母であり

わたしもまた

金色に輝くおまえの 遥かな

遥かな母である。

山から来たの
と 黄蝶は言った。
ならば戯れに
捕らえてみようか
と 魂
と いうもの。

(初出・朝日新聞石川版)

将棋のソネット

桐田真輔

鋼鉄の舟のかたちの布陣を抜け
ひとり前線に急ぐ銀の鎧の若武者
誰もが捕虜となれば寝返る
死ぬ者のない消耗戦のはじまりだ

荒涼とした原野の果て
はるかに前線を遠望すれば
居並ぶ兵の槍襖の間から
優美な美濃囲いの陣容がのぞく

忽然と躍りあがる騎馬武者を

兵が射止める間隙をぬって

滑空する龍騎兵の蜥蜴に似た黒い影

混迷する敵陣に紅蓮の旗は翻り

右翼から瓦解する城塞深く

王はまだ穴熊のように身を潜めている

エイハブの左足・ランボアの右足

有働薫

メルヴィルとランボアは同じ年に生涯を終えている。

小説『白鯨』のなかで、作者メルヴィルは片脚の捕鯨船船長エイハブに、次のように語らせている。「今ここに眼にはつきり見える脚は一つきりだが、魂には二つあるのじゃ。おぬしがドキドキと生命を感じとる所、きつかりそこにわしも生命を感じとるのじゃ（*）」。

魂の感じる足はいつもちゃんと揃っているのだ。

小説の中で、エイハブは左脚を抹香鯨に食いちぎられたからだを、不便ではあれ、この苦痛をもってあの鯨と再び闘いたいとすさまじい熱情を燃やす。

ランボーは詩を捨てて実業で人生を作り上げようと北アフリカの砂漠と格闘したあげく、右脚を切断せざるをえなかった。すさまじいのは、北フランスの故郷の農家からたちまち憑かれたように南へ向ったことだ。幻影の足で歩いて。

北アフリカへの入口であるマルセイユで死ぬ。魂は自分が人生をかけ、自分をまさに滅ぼさんとしている砂漠を歩いているのだ。

小説『白鯨』である程度の名声を得ながら、人生の後半に十九年間ニューヨークで通勤生活を送らざるをえなかったメルヴィルはしかし七十二歳で命尽きるまで出版の見込みのない小説を書き続けた。

メルヴィルは一八九一年九月二十八日ニューヨークで、ランボーも同じ年の十一月十日マルセイユで三十七歳の命を閉じた。

ふたりのあいだには年齢としてはちょうど父と子ほどの開きがある。

(*原光訳)

Eclipse

水島英己

遠い夜のア・カペラ

成長することのない人格が歌っている。

アレクセイやミーチャ、イワンの兄弟も歌っている、

父を探して、

父に会いたくて、

兄弟や姉妹という響きは、すばらしい。

歩き続けて、疲れたときの脚、

頭脳のない肉、天才のいない才能、

習いすぎ、覚えすぎたゲップ。

ああ、月も出ない、ただ燃えている恒星を、ただ真似する、熱だけは異常な惑星。

度を過ぎたことを好むド氏は

「変である」「ことこそを正常と見なす。

ヒデミ、常に最高に低く、

それはおまえの意識する「公転—revolution」のせいではなく強いられた恵みだということを、知らねばならぬ。

冬至を目標に生きることだ。

ただ「自転—rotation」にのみ生きるものは

出会いを知らない。

いわく、

「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。

だが、死ねば、多くの実を結ぶ」

惑星である。

ただ、もう異常な惑星である。

死ぬこと、死ななければならぬ。

なんという不思議なことであろうか、

私も父である。

ゾシマ長老よ、

これが私の最愛の肉です。

ヨウコ

ウシオ

と申します。

わたしの血と肉を分けた娘と息子です。

わたしは生きているのに、

しかし、わたしは生きていますのでしょいか？

アレクセイやミーチャ、イワンの兄弟も歌っている。

それぞれの切り離された重奏で、それぞれの「留—station」を歌うだけで、それだけで、精一杯だ。

わたしはペシミズムの底を歩みながら

乖離することはない、

わたし。

癒される温泉などはいらぬ。

わたすのだ、さみしい夜のア・カペラ。

ぶらんど

岡田すみれこ

よくある事です 気にしないで下さい と短い添え書きがあり
選別されてわたしはひとりになる

むかし誉められたときも

いま外されたときも

怯える小動物のように 心臓の音をきいた

プライド たとえばロッカールームで

強引に抱きすくめられキスをされても

傷つかないようだ じぶんは

苦い嫌悪だけが舌先に残る

吐き出すか 飲み下すか

カップに残ったインスタントコーヒーと同じだ

きのう返された原稿用紙の中で

ことばがひどく窮屈そうにみえたから

さらに引き出しの奥にしまいこんできた

窒息させる気かもしれない

今朝は意味ありげな上司の腕に捉ってしまっただけ
たぶん鎧よりも遥かに軽い制服を着てデスクに戻れば
いくらでも笑顔はつくれる

「あたしはなにも知らない」

そのとき降り注ぐ枯れ葉がガラス窓に誘いにきて

記憶の中の前稿用紙と からだに触れる制服を
ゆらゆらと比べはじめる

「ほんとうは知っているよね」

湧き上がる囁きに耳を塞ぎたいのに出来なくて

つよく握るボールペンのさきから 意味のない文字が重なっていく

敗北

「取り返しをつかない」ことはいつもこっそりやってくる

静かな衝撃にそなえて足音をたてずに

かならずおくれつついてくるのだ

真夜中

閉め忘れた蛇口から滴る音にようやく気がつき
慌てて戻ろうとするときにはすでに

床に水溜りができていて　そこへは近づけない
暗闇に広がるつめたい悪意の予感に　素足がおののく

あれほどにつつましく輝いて

誇らしげに夢を叶えた花嫁のようだった自分は

ひとり、ふたりと去った宴に取り残されて

虚ろに木のテーブルを見つめている

物語はそのまま置き去りにされ

言葉たちは寝台のように黙り込み

小賢しく取り繕っていたことを見破られたような敗北感が

ひたひたとそこまで忍び寄ってきている

手のほどこししようがなく遅いから

もう蛇口を閉めにいかないのか

それともスカートの裾をたくし上げ

切れるほどに冷たい水を渡って行くつもりか

重ねてきた歳月が 夜に滑り込んでいったから

このさきはずっとまだくらくかかもしれない

きつとどこまでもくらくなのだ

だがすでに 爪先は何かにさわっている

ふとその生ぬるい感触に気がついて

わたしはやつと「取り返しつかない」意味を知る

閉め忘れた水道水さえ もはや体液のように自分だ

孤独なシミを 僅かに広げているのにすぎない

島影の見える場所から — 沖縄 1987年の記憶のために

石川為丸

間違えた道に合歓の花

おぼろげなそのうすももの花色にさそわれて

ふとあてもなく 出かけてきたのだ

赤土のパイナップル畑 尖る丘

白雨のなかを

濡れたトカゲがちらちら舌を出している

切れた尻尾がびくびく動いている

ここは沖縄 島影の見える場所から

遠く思う

今は秋で

人もまばらになり始めた季節の

あれは大陸の黄沙のとどいた春だった

ぼろぼろの古い地図を捨てられずにまだ持ち歩いていた
自分を見失い 転変の身の上のその日暮らして
人も見失い

日々は流れて

欠けているものばかりが私の暗がりで騒いでいた

枯れ草を踏んでいけば

ギシギシ 骨の割れる音がした

島影の見える場所から

遠く思うよ

黄ばんだ古新聞に包まれた壇が割れていた

ガソリンが滲みていた労働着

吊るしたまま 日々は流れて

沖縄の陽にやけた子どもらの足もとにも統合の波が寄せていた

大きな蛾の舞う教室にも入り込む君が代の腐った旋律

死んだ時間が流れ込んでくるのは

国体

ソフトボール競技開始式

一九八七年十月二六日

日本ソフトボール協会会長の燃え狂った

日の丸の焼かれた空は

あくまでも青かっただろう

砂糖黍畑ざわざわ騒ぎ始めたわが奥歯の痛む村よ

ひと夏の解体した群青の裏側に潜んだ不穏の分子よ

ひとのいのちのかなしみをかくす 砕けた骨の埋まる空洞を

その秋の日

すずやかに海風が吹きぬけただろう

地の底から

天の果てへ

辿りつくべき時を探しあぐねている死者の数々

ユウバンマンジャー ただそのためだけに

光っていただろうか

島影の見える場所から

遠く思うよ

ユウバンマンジャー

あてどもない私のさまよいも揺れも 帰路である今も

老
残

若
井

こ
が
ら
し

ヒ
ユ
ー
ヒ
ユ
ー

ヒ
ユ
ー

と
う
が
ら
し

ヒ
ー
ヒ
ー

ヒ
ー

出
が
ら
し

チ
ヨ
ボ
チ
ヨ
ボ

チ
ヨ
ボ

探して、愛

一瀉千里

ソウルの晩秋は 十一月半ばでも
氷点下になる

舞台装置は すっかり夜で

銀杏並木の道が ほのかに照らし出されている

胸に 熱い想いを抱いた

眠れない猫たちが

連なって ソウルの街を

徘徊する

あのかどの レトロな喫茶店

歩きなれた都会のネコが エスコートをする
天井が高くて 広い店
暖をとるには ちょうどよい

カプチーノを くださいな
チーズケーキも つけてね
言葉が通じない
身振り手振りで 説明をする

部屋の中は ノエルのように
見知らぬ桌たちが こちらを見ている
届いた コーヒーカップの中には
覗くと 浮かんだハートがふたつ

銀杏の葉っぱが 雪のように舞い落ちて
みとれる 硝子窓の外

チーズケーキを食べ終えたら
再び連なって ソウルの街の中

喋り足りない猫たちは

次のアジトを探して 夜のとばりに消えてゆく
愛のカケラは どこですか？

明日は トキメキをもらいに行きます

液体

清水鱗造

透明な塊を磨いていると
窓に広がる空が映る
ちぎれて湧いて広がって
消えたりする雲も

セーム革を当てて

研磨を続けると

球面を通して手にある茶色いシミが
大きく見えて皮膚に滲んで揺れる

窓際の瓶に無造作に生けられた花々の

角度によっては線香花火のような
花粉が先に付いた雄しべも映る

コーヒー茶碗を持ち

精密工作用メガネをかけて

さらにルーペを使い表面をたどっていく

細かい粉が数個見えた

それは

るり色のもの

翅を広げたまま

数頭の蝶が

映り込んだまま

レンズの液体に

含まれている

百行詩

田中宏輔

- 一行目が二行目ならば二行目は一行目ではないこれは偽である
- 二行目が一行目ならば一行目は二行目であるこれは真である
- 三行目が一行目ならば二行目は二行目であるこれは偽である
- 四行目を平行移動させると一行目にも二行目にも三行目にもできる
- 五行目は振動する

六行目が七行目に等しいことを証明せよ

七行目が八行目に等しくないことを証明せよ

八行目が七行目に等しくないことを用いて六行目が七行目に等しくないことを証明せよ
九行目が無数に存在するならば他のすべての行を合わせてただ一つの行にすることがで

きるこれは真か偽か

十行目は治療が必要である

十一行目がわかれば十二行目がわかる

十二行目がわかってても十一行目はわからない

十三行目は十四行目を意味する

十四行目は読み終わるとつぎの行が十一行目にくる

十五行目は十二行目の周りを二時間周期でまわっている

十六行目は二通りに書くことができる

十七行目はただ一通りに書くことができる

十八行目は何通りにでも書くことができる

十九行目は書くことができない

二十行目はゼロコンマ三秒の周期で自転している

二十一行目は二十二行目とイデオロギー的に対立している

二十二行目は二十三行目と同盟を結んでいる

二十三行目は二十二行目と断絶している

二十四行目は二十一行目も二十二行目も二十三行目も理解できない

二十五行目は二十四行目とともに二十二行目と二十三行目に待ちぼうけをくわせられている

二十六行目は二十七行目と目が合って一目ぼれした

二十七行目は二十八行目が二十六行目に恋をしていることに嫉妬している

二十八行目は二十七行目に傷つけられたことがある

二十九行目は二十八行目とむかし結婚していた

読むたびに三十行目がため息をつく

読むたびに三十行目と三十一行目が入れ替わる

三十二行目は三十三行目の医者である

三十三行目は三十二行目の患者である

三十四行目は三十五行目の入っている病院である

三十五行目は三十一行目の行方を追っている

三十六行目は出来損ないである

三十七行目はでたらめである

三十八行目は面白くない

三十九行目は申し訳ない

四十行目は容赦ない

四十一行目は四十二行目と違って異なっている

四十二行目は四十三行目と違っているが異なっていない

四十三行目は四十四行目と違っていないが異なっている

四十四行目は四十五行目と違っていいし異なってもいい

四十五行目はほかのすべての行と同じである

四十六行目は四十七行目とよく連れ立って散歩する

四十七行目は四十八行目ともよく連れ立って散歩するが

四十八行目はときどきもどってこないことがある

四十九行目は五十行目と散歩するときには寄り添いたいと思っているが
五十行目はそんなそぶりを微塵も出させない雰囲気をかもしている

五十一行目は慈悲心を起こさせる

五十二行目も同情心をかきたてる

五十三行目は寒気を起こさせる

五十四行目は殺意を抱かせる

五十五行目は読み手を蹴り上げる

五十六行目は五十七行目のリフレインで

五十七行目は五十八行目のリフレインで

五十八行目は五十九行目のリフレインで

五十九行目は六十行目のリフレインで

六十行目は五十六行目のリフレインである

六十一行目は朗読の際に読まないこと

六十二行目は朗読の際に机をたたくこと

六十三行目は首の骨が折れるまで曲げること

六十四行目はあきらめること

六十五行目はたたること

六十六行目は揮発性である

六十七行目は目を落とした瞬間に蒸発する

六十八行目ははずして考えること

六十九行目のことは六十九行目にまかせよ

七十行目は他の行とは分けて考えること

七十一行目は正常に異常だった

七十二行目は異常に正常だった

七十三行目は正常よりの異常だった

七十四行目は正常でも異常でもなかった

七十五行目は異常に正常に異常だった

七十六行目は七十八行目を思い出せないと言っていた

七十七行目は七十七行目のことしか知らなかった

七十八行目はときどき七十六行目のことを思い出していた

七十九行目は八十行目のクローンである

八十行目は七十九行目のクローンである

八十一行目は八十二行目から生まれた

八十二行目が存在する確率は八十三行目が存在する確率に等しい

八十三行目が八十二行目とともに八十四行目をささえている

八十四行目は子沢山である

八十五行目は気は弱いくせにいけずである

八十六行目は八十七行目とよく似ていてそっくり同じである

八十七行目は八十八行目にあまり似ていないがそっくり同じである

八十八行目は八十九行目とよく似ているがそっくり同じではない

八十九行目は九十行目とまったく似ていないがそっくり同じである

九十行目は八十六行目に似ていないか同じかのどちらかである

九十一行目はおびえている

九十二行目はつねに神経が張りつめている

九十三行目は睡眠薬がないと眠れない

九十四行目は神経科の医院で四時間待たされる

九十五行目はときどききれる

九十六行目はここまでくるまでいったい何人のひとが読んでくれているのかと気にかかり

九十七行目はどうせこんな詩は読んでもらえないんじゃないのとふてくされ

九十八行目は作者にだって理解できてないんだしだれも理解できないよと言

九十九行目はどうせあと一行なんだからどうだっていいんじゃないのと言

百行目はほんとだねと言っとうなずいた